Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2024, Vol. 14 ,64-67

報　告

2023 年度 人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

宮内　　孝
本田　和也
山之内　幹
西田　雅美
早川　純子

はじめに

子育て支援センターは、2010 年 4 月に学部が開設されると同時に設立された 3 つの附属機関の一部であり、これまで学生の学びを深め、実践力を養いながら地域に貢献してきた。子育て支援センターは、子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「子育てひろば みなみん」「心理サポート」の 5 つの主要な活動分野を中心に、地域の子育て支援活動を展開している。

「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」は開設当初から実施されており、「子育てひろば みなみん」は 2015 年 5 月から、そして「心理サポート」は 2016 年 9 月から継続的に実施されてきた。これらの活動は、学生が学びを深めながら地域社会に貢献する拠点としての役割を果たしている。

「子育て支援室」は、臨床発達心理士の資格を持つ学部教員が地域住民を対象に子どもや子育てに関する心理相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育専門の学部教員と学生ボランティアが、運動の苦手な子どもたちとその保護者に運動遊びを提供し、「あそびの教室」は美術専門の学部教員と学生ボランティアが、工作を通した親子遊びを提案するものだ。

「子育てひろば みなみん」は、非常勤保育士と学生ボランティア、そして学部教員が協力して、地域の未就園の乳幼児と保護者を対象に、交流の場を提供し育児相談を行ってきた。一方で、「心理サポート」は学部教員が障害のある子どもと保護者を対象にして、コミュニケーションや姿勢・動作への支援を行う活動である。

ただし、「子育て支援室」と「あそびの教室」については、臨床発達心理士の資格を持つ担当教員の不在や新型コロナ感染拡大の影響により、活動が中断されている。「子育てひろば みなみん」についても、コロナによる自粛を経て、今年度後期に再開された経緯がある。

以上のような取り組みを通じて、子育て支援センターは地域社会に貢献し、学生たちにとって実践的な学びの場となっている。

以下は、2023 年度「人間発達学部附属子育て支援センター」の活動内容である。

1．チャレンジ運動教室

(1) ねらい

幼児・児童の体力・運動能力は、低下傾向を示している。この問題を解決する一助として、「チャレンジ運動教室」を 2010 年から継続的に開催している。この 14 年間の申込者合計は 2759 名であり、172 回の教室を開催している。5 歳から 8 歳までの 4 年間にわたって継続的に参加する子どもは少なくない。

参加する保護者と子どものそれぞれのねらいは、下記の通りである。

・保護者……子どもと一緒に運動を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに、運動遊びを楽しむ時間を子どもに設定しながら、子どもの心身の発育発達を促す。

・子ども……運動遊びの楽しさやできない動きができる楽しさを味わいながら、多様な基本的な動きを身に付ける。この楽しさを動機付けとして、日常生活のなかで運動遊びに取り組む意欲と態度を育てる。

(2) 令和 5 年度の教室の概要

①参加申込者：188 名
　・幼児（5.6 歳）とその保護者　36 組
　・小学校 1.2 年生とその保護者　53 組
②教室開催回数：12 回

③ 教室の内容

本教室では、特定の動きの習熟を意図する「動きの洗練化」ではなく、多様な動きの習得を意図する「動きの多様化」を目指している。本年度に取り組んだ運動遊びは、下記の通りである。

a) 移動系の遊び

・鬼ごっこ　・バルーン遊び

・しっぽ取り　・サーキット遊び　等

b) 操作系の遊び

・タオルを使った遊び　・新聞紙遊び

・ステックザゲーム　等

c) 姿勢制御運動系の運動

・跳び箱遊び　・鉄棒遊び

・マット遊び　・ダンス　・綱引き

・新聞紙遊び　等

④ 子ども教育学科学生の参加者：のべ 195 名

宮内ゼミに所属する 3.4 年生が、本教室の企画・運営そして運動指導の中心を担う。1.2 年生は、子どもとかかわりながらゼミ生の運動指導のサポートを行う。

当初は､子どもへの説明･指示がままならなかった学生が、子どもたちや保護者を対象とした運動指導ができるようになる。この経験は、教師に必要な実践的な力量形成に寄与している。

(3) 成果と課題

・参加者アンケートによると、子どもの運動への愛好度が高まり、活動への満足感も高い。また、「学生さんの励ましは、子どもにとって大きな刺激となっている」「学生さんの指導によって、できることが増えた」など、参加した学生への肯定的な評価を得られている。

・幼児期から児童期への系統的な指導プログラムを、さらに開発する。

2．ぴよぴよ

本講座「ぴよぴよ」は，ことばや発達の気になる１・２歳児と保護者の遊びの場である。実施に当たって，主な目的としては，以下の３つである。

①地域在住の１・２歳の言葉や発達の気になる子どもの療育を行う

②保護者も療育に参加することで，保護者が子どもへのかかわり方を学ぶ

③サポーターとして学生が参加することで，子どもへのかかわり方や保護者支援の在り方を学ぶ

(1) 実施の概要

月１回，年間 10 回（４月と３月は除く）実施した。実施日は，基本的には，毎月の終日曜日に行った。日曜日に実施するのは，平日に比べ，保護者が参加しやすいということからである。

指導に当たっては，ゼミ担当教員の本田が実施し，本田ゼミの３，４年生 13 名がサポーターとして参加した。

①参加組数

参加する子どもたちの実態等を踏まえ，今年度の定員を７組とした。

②活動内容

主な活動内容は，以下の通りであった。

時間	内容
９：３０～１０：００	受付
１０：００～１１：００	自由遊び・設定遊び
１１：００～１１：３０	保護者勉強会

設定遊びの主な流れは，以下の通りであった。「メインの活動」は，子どもたちの実態を踏まえ，「新聞紙遊び」,「風船遊び」,「花紙遊び」などを行った。

設定遊びの主な内容
あいさつ
シャボン玉
大型シーツ
ペープサート
メインの活動
読み聞かせ
さようなら

③保護者勉強会

毎回 30 分程度実施した。本公開講座は，「インリアル・アプローチ」によるかかわり方を基本としており，その技法を保護者に伝え，どのようなかかわりが子どもとの関係性を育むのかを学んでもらった。その後，「共同注意」や「愛着」などを中心に，具体的なかかわり方について学んでもらった。

(2) 今後の課題

本講座は，今年度から本学の公開講座の一つとして実施した事業である。来年度以降も実施しながら，以下の課題点に対応し，地域に根差した活動を続けていく予定である。

・　地域在住の１・２歳の言葉や発達の気になる子どもの療育の在り方を検討していく。
・　保護者も参加する「親子療育」の在り方を，地域に提案していく。
・　本学科の学生が，縦断的に子どもへのかかわり方や保護者支援の在り方を学ぶ環境を整えていく。

3. 子育てひろば「みなみん」

子ども教育学科開設以来、子育て支援センターの取り組みの一環として、子育てひろば「みなみん」を実施している。「地域の子育て家庭を支援すること」、また、「学生が乳幼児とその保護者との関わりを学ぶ機会を作ること」を目的として、コロナ禍以前は、定期的に開催を続けてきた。令和２年３月から令和５年３月（令和３年 11・12 月を除く）までは、新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から活動が見合わされ、本年度より再開の見通しであったが、準備が整わず、本格再開とはなっていない。今回は、再開に向けた一歩として実施した令和５年 11 月と 12 月の活動について報告する。

(1) 実施概要

①実施回数：計２回

開設時間は午前 10 時から 12 時までである。実施日の詳細は以下のとおりである。

その他､12 月３日（日）は､ひばり祭開催に伴い、子育て支援センターを「休憩室」として開放した。

11 月	18 日（土）
12 月	16 日（土）

②利用者数

実施した計２回で利用した利用者数は、保護者の数と子どもの数を合わせて､のべ 35 名であった。

２回とも、専用の案内文書、学科公式インスタグラムからの事前予約を依頼し、ご参加いただいた。

12 月３日（日）は､事前予約ではなく､センター入り口に掲示を行い、未就学児の親子が自由に利用できるようにした（利用者：６組　16 名（保護者８名　子ども８名））。

③参加学生

11 月 18 日（土）、12 月 16 日（土）の２日間については、４年生の教職実践演習（保幼）の履修者を対象に企画運営に参加、また高校生ボランティアの参加も１名(事前申込５名､当日参加１名)あった。12 月３日（日）については、２年生のボランティア学生（３名）が参加した。

④運営スタッフ

参加学生と教員２名で運営を行った。

(2) 取り組みの実際

令和３年 12 月以来の実施となったため、事前に４年生の教職実践演習（保幼）の履修学生全員で環境整備から行った。センター内の掃除、マット清掃と張替え、布団等の洗濯、玩具の消毒などを念入りに行った。その後、これまでの記録を基に、活動の趣旨や活動内容について教員による説明が行われ、実施に向けた準備を行った。企画運営は学生が主体となり、これまでの実習やボランティア等を通して体得した学びをもとに進められた。

参加募集については、各回 10 組程度として事前予約による募集を行った。募集方法として、地域の幼稚園・認定こども園へ訪問の際（教育実習巡回指導）の案内文書の掲示依頼や、学科公式インスタグラムからの事前予約を行った。

当日は､風の強い日もあったが､子ども達が走ってセンターへ向かう姿や、以前参加されたことのある方の再参加、本学科の卒業生が保護者として子どもを連れて参加してくださり、センター内でゆっくりとお過ごしいただいている姿を拝見し、開催できてよかったと感じる取り組みであった。

活動の流れは以下の通りである。

９:00 ～　学生集合
（環境構成：掃除、受入準備、事前確認）
10:00 ～　親子受入　（受付、子どもの名前）
センター内の玩具等で自由に遊ぶ
11:30 ～　お楽しみ活動
（大型絵本　学生企画の活動）
12:00 ～　片付け　　終了

---

12 月 3 日（日）ひばり祭に伴い、午前 10 時～12 時までの２時間、子育て支援センターを「休憩室」として開放し、自由に過ごしていただいた。６組の利用（保護者８名、子ども８名）があり、学生ボランティアは子ども達と遊んだり、保護者の方々と話をさせていただいたりしていた。初めは緊張のためか、ややぎこちなさが見られたが、徐々に落ち着いてきて、表情も柔らかくなり、言葉掛けもスムーズになっていた。今回は特別な活動を企画しない形での実施であったが、子ども達はのびのびとセンター内で過ごし、あっという間の時間であった。帰る際、もう少し遊びたかった…という子ども達の表情が印象的であった。

(3) 今後の課題

今回の実施に参加した学生（4 年生､2 年生）は、コロナ禍以前の活動時には在籍していない学生であり、参加した学生の中には、「みなみん」の活動について知らなかった、という学生が多かった。現１～３年生についても同じことが考えられる。しかし、今回の参加により、普段関わることの少ない学生とも関わる機会が持てたことや、企画を話し合う中で新しい考え方や視点に触れることができたこと、保育はチームワークであり、連携の大切さや個々の質の向上が全体としての質の向上につながっていることを実感できたこと、子ども達の姿に合わせ臨機応変に対応することの難しさなど、自身の課題が明確になった学生もいた。在学生に対して、学内に有る子育て支援センターについて知ってもらうこと、子どもスペシャリスト育成の一つとして、「みなみん」の活動に参加することにより、乳幼児の子どもとの関わりや保護者との関わり、年齢や発達に合わせた遊びの提供、子育て家庭の現状と必要な支援について、理論だけではなく実際に経験することにより更に学びを深めることができると考える。今回、この機会を頂けたことに大変感謝している。

今後、頻繁な活動実施は難しいかもしれないが、少しずつ、しっかりと計画を立て、事前指導と準備を整え、一人一人が責任感を心におきながら、本活動の目的である「地域の子育て家庭を支援すること」､「学生が乳幼児とその保護者との関わりを学ぶ機会を作ること」､を達成できるよう、活動運営に努めたい。

4. 心を癒す音の贈り物　オルゴールを作ろう

2023 年９月１６日、高校生と一緒にポケットオルゴールづくりをした。幼児１人、小学生２人、保護者２人、そして高校生が３人参加した。一人一人が好きな曲を選んでオルゴールを作り、持ち帰った。またボンドを乾かす時間、ドーナツゲームをして楽しんだ。また 12 月８日は小学生１人、中学生２人、保護者２人、大学生１人でポケットオルゴールづくりをした。この日は、来年度実施する青空ラボの事前参観として、都城市教委の先生方の参加もあった。

オルゴールづくり

ドーナツゲーム

おわりに

2023 年度においても、子育て支援センターは人間発達学部による地域貢献活動の一環として、各教員の専門性を活かした取り組みを通じて地域の子どもとその保護者を対象にした活動を展開した。この過程で学生と教員、そして地域住民が協力し、大学と地域が一体となった子育て支援を行うことができたと考える。

新型コロナによる活動自粛期間を経て、センターでは多くの活動を再開させ、地域の子育て支援と子どもの育ちを支援する学生の実践的な学びを維持した。来年度には、これらの取り組みを一層充実させ、地域支援を更に強化していく方針である。引き続き協力体制を築きながら、持続可能な子育て支援の取り組みを進め、地域社会に貢献していくことを目指したい。